

「一人一人の発達の課題に即した指導の工夫」

宇都宮大学准教授 青柳 宏

1 日本の保育は本当に一人一人の保育を考えてきたか。

アメリカの心理学者の疑問：日本の保育は子どもの独創性・創造性をつぶしているのではないか。

日本では最初に協調性が問われ、その範囲内で個性が認められている部分がある。日本の親子（乳幼児期）の関係や保育者と子どもの関係を見て、日本の子どもたちが協調性を受容しすぎると、創造性や独自性が育たないのではないかと危惧していた。

知らず知らずのうちに「みんなで」を実践してしまおうことの問題

保育者が知らず知らずのうちに「みんなで」を強調してしまっている。もう一度、自分の保育や自分自身を見つめることが大切ではないだろうか。

子どもを「遊ばせる」ことが保育、という勘違い

子どもは遊びの中で育つという思いから、遊ばせておけばいいという考えに陥りがちである。2歳児くらいになると根本的な自立性が出てくる。この時期に「みんなで」が強調されてしまうと、子どもの独自性が育たない危険性がある。

子ども一人一人を「表現者」としてとらえる：レッジョ・エミリアの幼児教育

イタリアのレッジョ・エミリアの幼児教育は、子どもを一人の表現者として捉えている。日本の教育の弱いところは、子どもを表現者としてとらえ切っていないところである。子どもは自分の感じたことを徹底して追求していく存在であり、イマジネーションの湧き上がるものとして捉えているイタリアの教育には、見習うべきものがある。

「窓」をもてない子どもたち、表現しない子ども（学生）たち、傷つきやすい子ども（学生）たち

最近の不登校の子どもたちの中に窓をもてない子どもがいる。窓をもてないということは、自分自身のこだわりの世界がないということである。こだわりは、世界を見る窓となり、そこから自然や社会のことを考えたり、他人のことを考えたりできる。教育の中で、乳幼児期から自分の独自性を表現して、そこから協同性に向かう流れができるとうい。

「放し飼い保育」の意味：自己にも他者にも誠実、そして自他を超える基準（真理）を求める人格を育む

幼少のころ、ウルトラマンの絵を描くことが大好きで、何度も繰り返し描いてい

た。母親に褒めてもらうことより、上手く描けたときの満足感に意味があった。自分の追求するものが自分で実現できているかが大切である。放し飼い状態の中で、客観的な基準に自分の力で到達できたとき、子どもの自己肯定感がはぐくまれる。

日本の教育（保育）における「関係性」の質を再構築する：「一人」が「一人」と「協同」するというイメージ

日本の教育は、独自性から協同性というより、協同性から独自性という流れを優先しがちである。一人の人間が表現を追求していくことや、一人と一人の間に協同が生まれるイメージを保育者はもつ必要がある。21世紀は、一人一人の子どもを表現者としてとらえる保育を再構築していかなければならない。

2 タイプ論

「物語型」と「図鑑型」(内田伸子氏)

満1歳未満の子どもにも、すでに気質というものが観察できる。「物語型」とは、人間関係に興味をもつ人、「図鑑型」とは、人間関係よりも物に興味をもつ人と言う。人は、自分のタイプに当てはめて他者を考えがちであるが、始めからタイプが分かれていることを前提に他者を見ることも大切である。

シュタイナーの気質論：多血質、憂うつ質、粘液質、胆汁質

人間の気質は、古代の医師が人間の体液の割合でタイプを分けたことに始まり、その後ヨーロッパで伝統的に受け継がれている。シュタイナーもそれを引き継いだ。

- ・多血質・・・あらゆることに興味をもちながら、わずかな間しか興味を持続できない。
- ・憂うつ質・・・あれこれと思い悩んだり、じっと一つの事柄を心に抱え込んでいる。
- ・粘液質・・・自分の中にもぐりこんでいて、外に向かつては無関心な態度しか示さない。
- ・胆汁質・・・自分の強い意思を暴れることで表現しようとする。

子どもを類型化するには特別の目的がある。その類型に従って子どもを理解しようとする、その類型を知るように努めることは、保育者にとって重要なことである。

内向－外向、思考－感情、直感－感覚(ユング)

内向・外向はタイプとして保育の中でもわかりやすい。思考・感情は、性格として思考が優位か感情が優位かということ、直感・感覚は、物事を五感を越えて感じるか、五感を使って感じ取るかということである。これらの分類を組み合わせると8通りのタイプができる。

保育者のタイプ：「引っ張るタイプ」と「見守るタイプ」

子どもの遊びにどう関わるか、保育者が自分自身のタイプを知ること大切である。引っ張るタイプの保育者は、子どもの独自性をつぶしていないか、見守るタイプの保育者は、重要なときに子どものモデルになっていないのではないかということをも反省してみることも必要なのではないか。